

## ダイヤ高齢社会研究財団シンポジウム

人生100年時代の「つながり」を支えるICTの力  
ー虚弱(フレイル)や軽度認知障害と向き合うー

平成27年11月5日開催

人生100年時代と言われる今日の日本では、高齢者の虚弱化や認知症発症の問題がクローズアップされています。身体や認知機能が衰えると社会との「つながり」が薄れ、より重症化してしまうリスクが高まるおそれがあります。そこで、最近注目を浴びているICT(情報通信技術)を社会との「つながり」の手段として虚弱や認知症対策に活用する取り組みについて考えるシンポジウムを開催しました。前半では厚生労働省・民間企業・NPO 法人の方にご講演をいただき、後半のパネルディスカッションでは駒澤大学教授荒井浩道先生をコーディネーターにお招きし「いかに豊かに年を重ねるためのつながりを支えていくか」について話し合いました。以下にその概要をご紹介します。

## 【第1部】講演

地域包括ケアシステムの構築と新しい総合事業について  
厚生労働省 老健局 振興課 企画調整専門官 山口健太氏

山口氏からは、地域で高齢者の生活をどのように支えていくかー地域包括ケアシステムの構築ーという観点からお話がありました。4人に1人が高齢者(65歳以上)となっている日本では、今後、認知症高齢者の増加が懸念されていますが、元気な高齢者もたくさんおられるので、彼らに支える側になってもらうことがとても重要であり、それが高齢者自身の「介護予防」にもつながるとの説明がありました。

また、地域の特性を活かして住民が主体的にいろいろな活



動をしている自治体の紹介があり、そこでは町全体の高齢者が生き生きと生活しているとのこと。厚生労働省は、地域内での支え合いがより進むよう、介護保険制度の見直しを通じて介護予防・生活支援サービス事業などの後押しをしていくとのこと。

## 虚弱の両親を見守るICTと体制づくり

ソフトバンクモバイル株式会社 プラットフォーム戦略部 課長 徳永和紀氏

徳永氏は自社内に留まらず、思いを一緒にするパートナーと精力的な事業展開をされています。今回はその中の一例として、ベッドに取り付けて病気や介護を受けている方の状態を安全かつ自動的にモニタリングする「見



守りセンサー」と呼ばれるコンパクトな装置(非医療器具)の実演をしていただきました。家族に寝たきりで介護が必要な方や終末期の方がいる人のために、その方のそばにいられない時でも、24時間体制で体調の変化を見守ってくれるシステムです。介護士や看護師が不足していく中で、虚弱な高齢者やその家族の方々が求めている「見守りサービス」を、使う人の立場に立って、かつ採算に見合うように社会実装するにはどのようにしたらいいか、ということに苦心されているとのこと。

その他にも様々なICT関連のシステムを手掛けておられますが、機械は便利で役に立つデータを集めることができるが、それを誰がどのように使うかが大事であると付け加えておられました。

## シニア目線で見えた「高齢化・認知症を支えるICTの新しい役割」とは 「新老人の会」スマート・シニア・アソシエーション代表 <sup>まき たけし</sup> 牧 壮 氏



現在78歳の牧氏がパソコンやケータイなどのICT機器をよく使うようになったのは、定年退職後にマレーシアで生活するのに、ビジネスに必要であったり、日本と“つながる”ためだったそうです。

10数年後に帰ってきた日本は超高齢社会を迎えていました。

現在は高度情報化社会と呼ばれているものの、シニア世代には取り残されている人が多いのではと感じているそうです。

講演では、100歳でフェイスブックを始めた聖路加病院の日野原先生や認知症でも日々の生活にタブレットを活用している方を紹介しながら、「これからは自立した生活を続けるためにも、シニアこそ、日々使いやすくなっているICT機器を使いこなしていくべきだ」とおっしゃっています。

インターネットなどのICTが高齢者の孤独や孤立を防ぐのに必要不可欠な時代になろうしているが、高齢者自身が情報を発信すべきであり、そのことが「見守られる」ことにつながるのでは、と力説されていました。

### 【第2部】パネルディスカッション

いかに豊かに年を重ねるためのつながりを支えていくか  
コーディネーター:駒澤大学文学部 社会学科社会福祉学専攻 教授 荒井浩道氏

荒井先生は大学で教鞭をとられる傍ら、群馬県のご実家(泉龍寺)で副住職をされています。最近ではインターネットを利用してお墓参りができないか、ということも考えておられるとのことです。



誰もが年をとれば虚弱化(フレイル)や孤立化のおそれがあります。今後は一人で暮らす高齢者の急増が予想されるが、ICTの活用によって“緩やかなつながり”を保つことで、高齢者の孤立を防ぐことができる可能性が高いのではないか、と強調されています。



パネルディスカッションでは、前半の三名の講演者に対し、荒井先生から次のような質問があり、議論が進められました。

- ・厚生労働省は、地域包括ケアシステムを推進しようとしているが、具体的にはどのようにしていけばいいか。またキーマンとなるのは誰か。
- ・「被災者の方にタブレットを配ったが、あまり使われてない現実がある・・・」というような話を聞いたことがあるが、ICTを社会に浸透させるためのポイントとは何か。
- ・ICTには人と人が“つながる楽しさ”があり、ICTを使えば「地域」の意味合いも日本国内に留まらず世界全体と考えることができると思う。高齢者が多数おられる「新老人の会」SSAが行なっているような取り組みはどのようにして実現したのか、秘訣を教えてください。

牧氏からは「高齢者がICT機器を使っていく場合、まず『安心・安全』が肝要であり前提」との発言がありました。例えば「新老人の会」のフェイスブックでは、グループメンバーを会員に固定しているとのこと。また、高齢者がよりICT機器を使用しやすいよう、費用面での配慮が必要との考えをお持ちです。

これら以外にも、認知症高齢者の見守りや詐欺対策など様々な視点から熱心な討議がなされました。

最後に荒井先生は「高齢社会というと、ネガティブな捉え方をされがちではあるが、本日討議をしてみるとICTによってポジティブに変換する可能性があるのではないかと。誰もが高齢者になっていくのだという当事者意識を持って、新“8020運動”(80歳で20人の友達とつながろう!)を広めて行こう」と締めくくられました。(鈴木 章一)

なお、本稿では紙面の都合でごく一部しか紹介できませんでしたが、今回のシンポジウムの講演録を「ダイヤ財団新書36」として発行(2016年3月予定:無料)いたします。ご希望の方は当財団までお申し込みください。